

KOKUGO

受賞作品 | 国語部門

〈総評〉

本年度も、「自身の考えや意見がしっかりと述べられているか」「読み手に伝えるために重要な表現力や文章構成力が各学年に応じて身についているか」といった点に着目し、選考の基準といたしました。

今年は作文と読書感想文を合わせて647作品の応募がありました。全体的な傾向として、SDGsをテーマにした作文や読書感想文が多く見られました。ただ、その多くはテレビやインターネットで軽く知った程度で、内容や意見が表面的なものでした。自身の経験を通して深く考察し、それを優れた文章にまとめた作品というものは、なかなか出ないとも感じています。ただ、その中でも今回選出した入賞作品はどれも読み応えのある素晴らしい作品ばかりでした。インターネットやスマートフォンの普及により、情報のインプットは手軽になりましたが、やはり大事なのはインプットの質（自分自身の体験を通して知る、書籍等で深く調べる）とアウトプットの質（文章を書く力、自分自身の考えを相手に分かりやすく伝える力）だと改めて感じました。



文部科学大臣賞

私の夏

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 2年
平山 奈々子



子どもの文化・教育研究所 理事長賞

あげちゃんまたね

愛知県 岡崎市立男川小学校 1年
柴田 奏佑



一般社団法人日本児童文芸家協会 理事長賞

自分自身であること

東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部 2年
小林 大煌



中央出版株式会社社長賞

「一房の葡萄」から学ぶ、 「赦（ゆる）す」ということ。

静岡県 静岡学園中学校 1年
栗下 琴音



優秀賞

おおきくなったよ

鹿児島県 霧島市立天降川小学校 1年
奥 瑛慎

世界の友達のためにできること

神奈川県 マリア・モンテッソーリ・エレメンタリースクール 2年
岸 奈々桜

ツンツン、ネムネムありがとう

鹿児島県 鹿児島市立石谷小学校 2年
有村 実桜

文部科学大臣賞

私の夏

平山 奈々子 | 愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 2年

〈選考理由〉

「この夏は私たちがしゅやくの夏だ。」という書き出しで始まる、奈々子さんのチアダンスにかける熱い思いを綴った作文です。幼稚園児のころから始めたチアダンス、レッスン中の辛い気持ちや先生に注意されたことが上手くできなくて涙が出るほどくやしい気持ち、それでもあきらめたくない、上手になりたい、チームのみんなと大会に出たいという気持ちを子どもらしい素直な言葉で表現しています。そして、大好きなチアダンスをとおして様々なことを学び成長していく奈々子さんの姿には、思わず胸が熱くなり応援したい気持ちにさせられます。「休みの日も、レッスン。学校がおわったらいそいでじゅんびして、レッスン」や「こんなにやってるのに！毎日やってるのに！できない自分がきらいで、なみだがとまらない」など、この作文は文章のテンポやリズムが秀逸で、レッスンの様子やそのときの奈々子さんの気持ちが読む人の頭と心の中にずっと入ってきます。特に、壁に向き合った時、どう気持ちを整理し乗り越えるか、そして最後までやり通すことの大切さを学んでいるところ、厳しい指導の中にも愛情を持って接してくれるダンスの先生や大好きなチームメイトたち、そして娘の思いを全力でサポートしてくれる家族への感謝の思いも伝わる素晴らしい作文です。

子どもの文化・教育研究所理事長賞

あげちゃんまたね

柴田 奏佑 | 愛知県 岡崎市立男川小学校 1年

〈選考理由〉

お隣の家の庭でゆずの木に卵を産み付けているアゲハチョウを見つけた奏佑さん、その卵を育ててみたいという思いから始まるこの作文には、奏佑さんの小さい生き物に対する本当に深い愛おしさ、愛情を持って見つめる関わる眼差しと態度が描かれていて、読む人の心を温かくさせます。

奏佑さんの文章は、小学1年生とは思えないほど描写力が優れています。「(アゲハチョウは) おしりからひとつずつ、ながぼそいまるのかたちをしたきいろのたまごを、ていねいにうみつけていました」や「そのうち、ちいさなけしごむのかすみたいなようちゅうがうまれました」、「あげちゃんのさなぎのすぐよこに、はねをひろげたりっぱなアゲハチョウがとまっていました」などの描写からは、奏佑さんがアゲハチョウをととても大切に飼育し、卵から幼虫、そしてさなぎから成虫へと成長していく様子を注意深く観察していたことが伝わってきます。

本で知った「おとなになったアゲハチョウは、たまごをうんで、いのちがつながっていきます」という言葉から、最後は生まれたアゲハチョウを空に逃がしてあげます。昆虫の飼育や観察の記録という小学校低学年の作文によくある内容を「生命のつながり」「生命への敬意」という深いテーマに昇華させた、非常に優れた作文です。

一般社団法人日本児童文芸家協会 理事長賞

自分自身であること

小林 大煌 | 東京都 早稲田大学系属早稲田実業学校中等部 2年

〈選考理由〉

ヘルマン・ヘッセの『車輪の下』を読んだ感想文です。授業で学んだヘッセが、どのような十代を過ごしたのかに興味を持ち、自伝的小説といわれている本書から主題に迫ろうとした作品です。

大煌さんは、主人公ハンスの心理が細かく描写されているにも拘らず、「心の衝動が感じられない」ことや「自分の気持ちをごまかして生きているように表現されている」という作品の表現効果に着眼し、その人物像に投影されたヘッセを導き出そうとしています。

また、ハンスの悲しく衝撃的な結末は、「子どもの心に寄り添わない大人たちへのヘッセの批判」と捉えつつも、「自分の気持ちや意志に正直に、自分自身の人生を生きること」というメッセージとしても解釈し「自分の人生を人任せにせず歩んでいく事」の大切さに気付きます。特に、小説の悲劇的な構成（結末）、作品のメッセージの解釈とまとめ方が上手で、自己に問いながら自分事として考えを深め、著者の背景にまで思考を巡らせた点が優れていて評価されます。

中央出版株式会社社長賞

「一房の葡萄」から学ぶ、 「赦（ゆる）す」ということ。

栗下 琴音 | 静岡県 静岡学園中学校 1年

〈選考理由〉

有島武郎の『一房の葡萄』を読んだ読書感想文です。主人公の「僕」と友達のジム、そして先生の言葉や行動から、人を深く「理解する」し「つながる」こと、本当の意味での「赦す」とはどういうことなのかを考え、本から学んだことを書き綴っています。琴音さんの文章は、その構成と展開がとても素晴らしいです。最初に主題（「赦す」とはどういうことか自分なりに考えてみる）を明確に述べ、次に物語のあらすじを自分自身の体験もふまえながら上手に説明し、最後に琴音さんの考える「赦す」とはどういうことなのかを、作者が物語に込めたテーマに重ねながら結論づけています。琴音さん自身も基督教の教えを受けているのでしょうか、「赦す」は基督教の教えの一つで相手の罪を責めずになかったことにすることや、作者の有島武郎も洗礼を受けていることなどから、この物語は基督教の「赦す」という考え方を背景にしていることを読み取っていきます。さらに一步踏み込んで、「相手の置かれた状況や背景を思いやり理解する」ことが表面的な言動に左右されず深い部分で「赦す」こと、また他者とつながると考え、この「赦す」精神を自分自身も実践していきたいと結んでいます。文章の一つひとつから琴音さんの思考力と表現力の高さがうかがえる、全国の小・中学生の模範となるような優れた読書感想文です。